明珠
龍泉院
参禅会会報

75

令和３年４月８日

従容録に学ぶ（七五）

第一一則　雲門両病

〔示　衆〕

衆に示して云く、無身の人は疾を患い、無手の人は薬を合す。無口の人が服食すれば、無受ぬ人は安楽なり。且云、膏盲き疾を如何んが調理せん？

〔本　則〕

挙ぐ、雲門大師云く、光とて透脱でざれば、両般の病いあり。一切処が明らかならず、両箇に物あり、是れ一つ。一切法は空なりと透脱れても、隠隠地に箇の物あるが似くで、相似なり。亦た是れ光を透脱れざるなり。又た法身にも両般の病いあり。法身に到得るも、法執を忘れず、己見猶お存するが為に、法身の辺に堕在る、是れ一つなり。直饒透得るも、放過むれば即ち不可なり。子細を点検し将来れば、甚麼の気息かあらん。また是れ病いなり。

『従容録』全百則のうち、最も多く〔本則〕が収められている祖師は雲門さんで、一三則もあります。すでに第三一則「雲門露柱」や第八二則「雲門声色」などでおなじみですが、まだ沢山残っています。少し急がないと。今回は第一一則でおもしろい則。

雲門文偃（八六四～九四九）は、唐末～五代初めに出た巨匠。浙江省の嘉興で生まれ、後に有名な雪峯義存に参じてその法を嗣ぎ、今の広東省雲門山に道場を開き、実に一千人の門下生を打ち出しました。その一代の教化のさまは、古くから『雲門広録』三巻として伝存しています。その門下は中央と結んで大発展をとげ、雲門宗を構成して北宋時代の禅界を席巻。雲門はその派祖であるにふさわしいすぐれた教えを垂れた禅者として禅界一般から大きな評価を受けました。ところでこの第一一則は異例の長文ですから、万松さんが一々の則に

付けた著語（コメント）は、残念ながらすべて割愛いたします。

まず万松さんの〔示衆〕を見ましょう。これがまた破天荒なのですが、まずは左記。

身体のない人が病いとなり、手のない人が薬を調合する。口のない人が食事をとれば、食べない人が安楽となる。イヤハヤもう、こんな救い難い病人を、どう療治したものかな？

およそこんなところ。本当にイヤハヤですね。特に難語が多くはないのですが、膏肓は胸と腹の間にあるので、病むと最も療治しにくい部分。法身は絶体真実の身ですから、ここでは仏身と同義。透脱はぬけ出ること。

万松さんは、ありえない人の例でもって、まだ分別ある者とそれを空無にした者も、共に病人だと断じ、また空無の者もただそうなっただけではこれまた病人だと、大変に手厳しい趣意を説示しています。

では、万松さんをそういわせた〔本則〕はどうなのか。例により、意訳的に示しましょう。

雲門さんが云われた。分別している者と離れても空の境地にとどまっている者も共に病人。また法身となっても、なったというこだわりのある人も、ただなったというだけの人も、ともに病人じゃ。

およそこんな意味ですが、イヤハヤ、これでは禅の修行者は病人だらけということになりかねませんね。

ではいったい、病を治した人のことを禅ではどう表現するのか？と思いますね。その前に、右のような表現は肉体上のことではなく、悟りや迷いという修証上のたとえであることを理解しなければなりません。

仏学院のある雲門山の大雄宝殿

こうした修行と悟りの世界を生涯にわたって追い求め、また学生たちに説きつづけてきた人に洞山良价がいます。

雲門さんよりは六〇年ほど先輩ですから、雲門は洞山から学ぶことも多かったにちがいないのです。その洞山には「心技双亡」という公案があります。

もともと、六祖さまの弟子である永嘉（ようか）玄覚の名偈頌『証道歌』の中にみえる語句ですが、意味は心とその対象物がなくなった時こそ、真実の本性たる法身となり、それこそ、真のさとりの風光だという教え。平たくいえば、主体と客体との一致した世界であります。

これは美しい花などを見て亡我の心境になるのとはちがう。対象物の中に入り切って、まさに対象のはたらきと波長を一つにしたいのちの世界、といってよいでしょう。

かの仙厓和尚が、池にとび込む蛙の絵を画き、「古池や芭蕉とび込む水の音」と賛をしたが、禅の悟境を詠んで、はなはだ妙ですね。芭蕉がえらいのではなく、これを悟境というとらえ方が妙趣なのです。

ただし、洞山さんのえらさは、たとい悟境に到達しても、まだ仏の周辺の遊びであると手きびしく、その心をはたらかせてこそ真の仏者であると説いています。

こうしてみると、ただ黙々と坐る打坐をはじめ、契茶契飯や作務万端がすべて仏作仏行であると教える道元禅師の禅は、やはり禅の核心をついているのですね。

参禅会とともに歩んだ五〇年

椎名老師

参禅会の皆さま方、会の発足五〇年という年を迎えられ、心からお祝い申し上げます。祝われるのは皆様方、会員お一人お一人のご精進でして、皆様一人々々が輝かしい軌跡を作ってこられたのであり、わたくしはただ皆様とともに歩んできたにすぎません。

憶えば、私がまだ三〇代後半の青二才だった昭和四七年七月、細々と参禅会を始めてからなんと五〇年！ほんとうに夢のようです。夢といえば、若いころからかすかな夢には見ても、とうてい現実のイメージにはならなかった坐禅堂をそなえた宗門の参禅道場寺院になったのは、これは正夢であります。

あの坐禅堂建設の頃を思い起すと、建設委員の方々は一丸となって無我夢中でした。初めの頃、私を含めて一〇名により、中程度の坐禅のある寺院見学（というより実地調査）の日、早朝に八千代市の長福寺さんを訪れ、次に茨城県結城市で昼食の後、孝顕寺さんの坐禅堂を見学、終って山門を出た直後、大地震に遭遇。尋常のユレではなく、山門外の石垣が大音響と共に崩壊。みな、車が転倒せぬよう両手で押えたほどでした。それは悪夢のような光景ながら、あの現実の三・一一の実体験でした。この稀有の体験は、次の建設委員会の動向に、まさしくカツが入りました。あの今から丁度一〇年前の東北大震災は、雲堂建立に対して一大カツを与えてくれた天の差配としか思えません。

元気に御提唱する御老師

その後の委員会の動向は刮目に値いし、多額の浄財を得て小規模ながら県内初の独立棟の雲堂開単をみたのは翌々平成二五年四月であり、会の諸活動凝縮の勝躅です。

会の発展期には、坐禅旅行・祖師慕古の旅（海外三回を含む）・講演会・展覧会・出版活動・ＰＣ開設・災害慰問・歳末托鉢と多彩。特筆すべきは在家得度であります。得度とは、いうまでもなく仏戒を受けて己れが仏弟子であることを自覚し新しい境涯に生きるための誓いであります。故に宗門では昔から諸行事中の最重要事と意義づけています。これをわが参禅会では過去四回（平成三、同一三、同二三、同二八）も実践し、受戒者の人数は六四名に達しています。再会（さいえ）などを重ねている方も他に四〇名ほどいます。

生き戒名の方々は、その後の参禅会活動に対して目の色が変った動向をとられます。坐禅はいわずもがな、他の諸行事や作務でも以前とは異なり、みな、己れの行持として行修するのだ、という心構えになるからであります。ですから、これを四回も行ったことは、単なる記念行事ではなく、期せずして会発展の原動力たる根本的な人材打出（たしつ）をなしてきたのであります。

かくて私は、間違いなく修道者の皆様によって育てられ、寺は参禅会のお陰で「参禅道場」となり、ネットを通じて外部からは注目されており、有難きことであります。みな参禅会の皆様あってのことと、感謝するばかりであります。私はすでに八八歳の老耄ですが、もう少し皆様方と共に歩みたいと念願しております。

至祷々々

新住職としての抱負

明石　直之師

時下　皆様におかれましてはますますご清栄のことと拝察申し上げます。この度、新しく龍泉院の住職を拝命致しました明石直之と申します。

月日が経つのは早いもので、私が千葉県柏市に足を踏み入れて一年半になろうとしています。その間、当初は平穏だった世の中は、コロナ禍に陥り、一時期は非常事態宣言等で世情は騒然となりました。

現在は以前に比べて社会は落ち着きを取り戻しましたが、冬場に再び感染者が増え、最近は減ってきたものの、予断を許さない状況となっています。私といたしましては、少しでも早く普段の日常に戻ることを祈念してやみません。

さて、私についてですが、改めて自己紹介をさせて頂きたいと思います。

出身は京都府宇治市でありまして、地元の高校を出た後、もともと仏教に興味をもっていた私は、龍谷大学に入学し、浄土真宗の教学を学びました。現在、私は曹洞宗の僧侶であり、宗旨は異なりますが、いずれ、この経験は今後の僧侶としての活動に活かされていくと信じています。

大学在学中、阪神・淡路大震災及び地下鉄サリン事件が世間を震撼させました。そこで、私は、テレビの中で被災者や被害者を果敢に救助し、復興のために献身する自衛官の姿を見ました。それに心を動かされ、大学を中途で辞め、自衛隊に入隊しました。

自衛隊での生活は約一九年におよび、東日本大震災の際は、災害派遣活動に従事し、災害の脅威と世の無常を改めて感じさせられました。

新住職の明石師

自衛隊を退職した後は、宮津市智源寺住職の高橋信善老師について出家得度し、以後、同じく智源寺で約四年半修行しました。

そこでは、坐禅・作務をはじめ典座としての務め、さらには各種法要に檀務と、禅宗の僧侶としての基本的で有意義な経験を積むことができました。その後、縁あってここ龍泉院に来させて頂くことになり、今に至ったわけであります。

さて、今般、私は新しく住職となったわけですが、就任に際して、以下の抱負を述べさせて頂きます。

第一に、お寺は信仰の場であります。その場に身を置く者として恥ずかしくないよう身を持するとともに、初発心の時の気持ちを忘れず、皆様方の信仰の一助となれるよう精進して参ります。

第二に、お寺はお檀家様にとってはかけがえのない聖地です。お預かりしたその聖地を清潔に保ち、お守りするのだという気持ちを終始持ち続けて、日々努めて参ります。

第三に、創立して五〇周年を迎える参禅会のさらなる発展のために、自身の坐禅及び宗学の研鑽にも鋭意取り組んで参ります。

以上、縷々述べさせて頂きましたが、私の人となりを知るうえでの参考にして頂ければ幸いです。

最後に、種田山頭火の句をご紹介します。

―　法堂あけ放つ　あけ放たれている　―

お寺の扉は誰にでも開かれています。皆様、お気軽にお訪ね下さい。

成道会

二〇二〇年一二月六日、第三八回成道会が開催された。椎名老師最後の成道会になる。まず、坐禅を二炷行じ、一〇時半から成道会、法話が順に行われた。参加者は二七名。問答参加者は一六名と過去最多になった。

【問答】

問：御老師にとっての仏道とは。
答：日々、ただ精進するのみである。
問：自分へのこだわりをなかなか捨てられない。どう心がければよいか。
答：己をなくすには、大自然の姿をとことん見つめることにつきる。
問：ダメなものは死ぬまでダメなのか。
答：死ぬまでダメだと思うのが本物である。
問：煩悩はいまだ去らない。これ如何に。
答：良い煩悩は去らないほうがよろしい。
問：洞山過水の悟りの内容とは。
答：「正」も「偏」も究極的には一つである。
問：うつ病の原因と考えられている「我」をなくすには。
答：我は死ぬまでつきまとう。払い落とすことはできない。我と共に生き、共に歩んでいくことである。
問：成功と失敗の違いはなにか。
答：その二つは正反対でなく、絡み合っている。それに囚われず、正しく真面目に歩んでいくことである。
問：死んだ親に会えるだろうか。
答：会おうと思えば会える。会えないと思えば会えない。
問：坐禅は自他の見をやめて学するなりとあるが。
答：坐禅はだれも代わりにやってくれない。自分が行ずる坐禅が本物である。
問：岩もあり　木の根もあれど　さらさらと　たださらさらと　水の流るる
答：そのようにありたいと私も常に思う。だが、なかなかうまくいかない。常にそういうものを見て聞くことが大事である。
問：御老師の今後の目標は。
答：眼が黒い間は寺男。その他、できることは何でもやるつもりだ。
問：「日々是好日」をさらに深め、「日々是日々」としている。これは如何に。
答：「日々是好日」を言葉通りに受け取ってはならない。自分が毎日を作っていく、ということを言われたのではないか。
問：なくせない我をどうコントロールすればよいのか。
答：かわいくて仕方ない自分とは関係のない自然の風物を常に見つめ、共に生きることである。
問：「丙丁童子来求火」をどう解釈したらよいか。
答：物事を敢然として行うには火ダルマのようになって行え、という教えである。
問：御老師の人生で一番誇らしかったことは。
答：何にもない。皆、人に助けられ、支えられてやってきた。
問：僧堂に赴く足取りは如何に。
答：足取りは極めて軽い。陰に陽にたくさんお世話になった。ありがとうございました。

【法話】

龍泉院とも縁が深い山崎弁栄上人について話された。弁栄上人は、米粒に「南無阿弥陀仏」と描いたことなどで知られる、柏市鷲野谷出身の浄土宗僧侶である。念仏に生き、念仏になくなった。感化力の素晴らしい方であった。

◇　　◇

新型コロナウイルス蔓延のため、今回はその後の点心および座談は中止となった。

歳末助け合い托鉢

二〇二〇年一二月一三日、柏駅東口コンコースで、一時から三時まで、恒例の助け合い托鉢を行った。参加者は御老師、明石師を含め一一名と例年より少なめだった。

穏やかな日和のもとで始まったが、二時を過ぎると寒さが沁みてきた。コロナ禍、外出は自粛気味との予想に反し、多くの人が行き交っている様はちょっと驚き。感染防止を考慮して、募金の呼びかけを控え、募金箱も一メートル前の椅子に設置。加えて、経済低迷もあり、皆さんからの喜捨は少なめ。

托鉢の出発前に長全寺で読経

参加者は修行と心得て納得の三時間を過ごした。集まった浄財は五万〇〇三〇円。全額、朝日新聞厚生文化事業団を通じて寄付した。

歳末の托鉢に参加して

柏市　川村　拓也

令和二年の師走の日曜日、歳末助け合いに参加させて頂きました。今年は好天に恵まれ、日差しの恵みが感じさせられる日でした。

御老師をはじめ、ふだんの参禅会の皆さまと共に柏駅東口の街頭にならび、のぼりを持ち、約二時間、募金活動を行いました。

令和二年はコロナウイルス流行の折から、ふだんと違ってマスクを着用、声かけを自粛、募金箱は参加者の首から下げずに、椅子の上に置いて行われました。「募金に協力願います」の声かけも自粛。前回、声かけを体験し、自分のこころの枠を忘れさせてくれたので、すこし残念に思いました。

昨年に比べ、コロナウイルス流行のためか、街頭の人出も少なく、また、声かけも自粛したためか、物静かな募金活動に感じられました。

ただ、人々の善意は変わらず、声をかけてくださる方々や深々と頭を下げて募金を下さる方々に暗い世相のなかで、慈悲のこころを見て、やすらぎをおぼえました。

私は、募金活動からの参加ですが、集合場所や募金箱等の準備、街頭での募金活動の事前許可をとって下さった方々のおかげで、はじめて募金も行えるのだと後から知りました。普段の参禅会と等しく、見えない方々のおかげで、自分の行いも成り立っているのだとの感を深くしました。

これからも坐禅に参加させて頂きながら、こうした行を通じて、微力ながら社会に貢献していきたいと思っています。

歳末の托鉢に参加して

柏市　村上　愛治

私は、自分から募金や助け合いに参加する方ではない。子供の頃はそうではなかったのかもしれない。私は、歳末托鉢に参加するため長全寺に向かっている。

大した理由はない。「少しは人の勧めにも耳を傾けたら」、と妻の小言に「もっともだ」と思っていた矢先だったからだ。それは御老師の勧めでもあった。

可愛い子供も献金

暖かな日だ。駅のデッキに到着すると募金箱を置き、托鉢が始まった。コロナ感染防止のため、無言で立っている。向かいでは携帯電話の交換キャンペーンを派手にやっている。我々に気づく人は少ない。

突然、私の前に人が現れた。緊張した様子で募金をして行く。二人目だ。やはり突然、現れる。私はあたりを見渡した。立ち止まって、こちらを見ている人がいる。大抵は、そのまま立ち去るのだが、意を決して、募金箱の前に立つ人がいる。勇気を振り絞って。

二時を回ると急に冷えてきた。一緒に立っている小畑節朗さんも、さすがに辛そうだ。「少し、休まれては」と声をかけるが「二時間くらい頑張ります」と仰る。

それを見た（小畑さんと同年代であろう）御婦人が「やれやれ」といった風な小さなため息をつくと、ゆっくり荷物を置き、ゆっくり募金を済ませ、何事もなかったように立ち去られた。なんの躊躇もない、堂々たるものである。

いつもより静かな年の瀬だ。「元旦は、冥土の旅の一里塚、めでたくもあり、めでたくもなし」。なんとなく、そんな歌を思い出した。

涅槃会

二月一五日、季節はずれの豪雨の中、涅槃会が行われた。今回は新しく住職になられた明石師が初めて行事を執り行った。コロナ禍とあって一般の方々の参加はご遠慮願い、参禅会員七名がお手伝いし、御老師も参加された。

涅槃会は二時に開始して、一五分で終了。そのあと、明石師の法話があった。終了後、雨が上がり、青空が垣間見えた。

明石新住職の法話は次の通り。

未知のウイルスは約一七〇万あるといわれています。しかし、発見されているウイルスに対し、効果がある抗生物質は少なくなっています。抗生物資の八割は家畜などに使われ、耐性を持ってしまったからです。

これに限らず、地球環境が大きく破壊されています。温暖化といわれますが、寒冷化も激しくなっています。これは人類が環境破壊を行っているからにほかなりません。

欧米では仏教が見直され「仏教経済学」という言葉も生まれています。これは、必要最小の資本で最大の効果を得ようというもの。仏教でいう「小欲知足」に当たります。この言葉を覚えておいてください。

涅槃会を行う明石師。遠方は御老師

特集　御老師と私（1）

鼎談『御老師と私』

御老師とはどのようにお会いし、薫陶を受けてきたか。長く参禅会に参加してこられた小畑節朗、五十嵐嗣郎、杉浦上太郎の三人の方に一月三〇日、腹蔵なく語ってもらった。

左から杉浦、小畑、五十嵐の各氏

御老師との出会い、印象

小畑　朝日新聞の広告に「坐禅あります、龍泉院」とあり、訪問した。「坐禅をやっていいのですか」と御老師に聞くと、「どうぞ」と快く承諾してくれた。当時は三名くらい坐っていた。

五十嵐　石川県に住んでいた母の葬儀の後、色々と法要があるため、知人を通して龍泉院を紹介して頂いた。四十九日の法要や納骨など、檀家でもないのに御老師には大変ご足労をお掛けした。

そこで、龍泉院の行事に参加することで義理を果たそうと思い、御老師にそれとなくお伺いしたところ、参禅会があることを紹介された。私の場合は浮世の義理的発想による参禅だった。

杉浦　ストレスの溜まっていたサラリーマン時代、永平寺で坐禅をした。そこで、坐禅修行の欲求が高まった。数週間後、県道を走っていたら偶然、龍泉院を発見した。最初の訪問時、「月謝はいくらですか」と尋ねた私に御老師は「不要です」とお答えになった。殺伐とした世界にいた自分には、その時の静かで慈悲に満ちた眼差しが印象的だった。

参禅会成立の経緯と御老師の考え

小畑　参禅会は坐禅と勉強（提唱）共にやりたいということで設立された。「坐禅会」としなかったのは、知識や作務なども必要だという意味が込められていると伺っている。御老師が入院されている時も、私達が鐘を鳴らし、休まないで行った。現在はコロナで難しくなったが、ここまで続いてきたのは大変なことだ。坐禅というものは広まりにくく、一〇〇人来られて本当に定着するのは一人か二人ではないか。ただ、昭和五八年頃に新本堂が出来て、そこから参禅者が急激に増えたようではある。

小畑　節朗さん

ちなみに、当初、参禅会に来られる方には三つのタイプがあったと思われる。一つはメインの「坐禅」に特別熱心な人、次に「提唱」を聴きに来る人、そして「座談」で禅的な情報を吸収しようとする人である。その頃は印象的なことを言う人が多かった。例えば、「坐

禅というものは社交にあらず」という内山興正老師の言葉がある。この言葉を受け「坐禅の後にお茶を飲むのはけしからん」と言う藤原さんという方もいた。後から内山老師に直接お聞きしたが、あれは接心のときのことを言っていたようだ。

エピソード

五十嵐　三つある。まず、平成七年に年番幹事となり、可睡斎への一泊参禅について御老師と打ち合わせを行った。しかし、当日は会社のゴルフコンペと重なり、しかも、幹事役だったので、一泊参禅に参加できない旨を話した。すると、御老師から「行けないのはどういうことですか」と睨みつけられた。会社の事情だからと、参禅会の行事を甘く考えていたが、御老師の参禅会に掛ける思いが半端なものではないことを知り、参禅会の行事を真剣に取り組むようになった。

二つ目は、駒澤大学の中国禅宗史の授業で、御老師の「『宝林伝』逸文の研究」という素晴らしい論文を紹介され、物凄い研究者だと知り、驚いたことだ。

三つ目は、平成二七年に湖南省の夾山寺を訪ねた時、客殿に達筆な字が書かれた大きな額が掛かっていた。石井団長からこの書は御老師が三〇年前に、夾山を参観された時に揮毫されたものだとお聞きした。帰国後、御老師に報告すると、団長として即席で書いたものだとお聞きし、驚いた。

杉浦　一一年前、「良寛さんと出会う旅」が行われた。晩年、良寛さんが暮らした国上山五合庵を訪問する前夜、現地の旅館で椎名老師から「漢詩／五合庵、冬夜長しなど」の特別講義を受け、翌日、見学した時の感激は最高で心に沁みた。

杉浦　上太郎さん

現地で五感で体験するリアルさは筆舌につくし難いものがある。新しい会員さんにも体験させてあげたいと思う。

もう一つは、御老師のお力で、奈良康明先生などの高名な講師と直接、面識を得られたことだ。例えば、東京大学名誉教授の鎌田茂雄先生に「あなたは俺に似ているね」と声をかけられ、「私もそう思います」と返した。

最後は、中国の専門家から気功を学んでいた時の話。そこで、受講生の中で自分だけが特別な体験をした。その時の指導者は、北京医科大学の教授で、日本医科大学の教授でもあった方だが、その方が「中国に来て学び、気功の先生になりなさい」と言って下さった。

そこから有頂天になった私は、御老師にその旨を手紙に書いた。すると、その返信は体験の是非に触れず、やんわりとやり過ごすようなものだった。それを読んで私は、「自分は世迷いごとを書いたのだ」とハッと目が覚めた。そんなことに囚われてはいかんと伝えたかったのだと思う。

小畑　私は正統的な学問をやったことがないが、書誌学の大家である御老師からは静かなる薫陶を頂いた。また、杉浦さんと同じく、多くの先生や講師と出会えたことは大変貴重なことだった。特に感銘を受けたのは、奈良

康明先生。あの方は、難しいことを簡単に言って下さる。これが出来たのも、周りのご協力を頂いたのが大きい。

大黒様について

小畑　大黒様は参禅会が始まってから四〇年以上、ずっと茶話会のお菓子を出して下さる。最近になるまでは、お茶の用意もすべてされていた。提唱が終わる前にはすでに、お菓子がお菓子鉢に載っている。

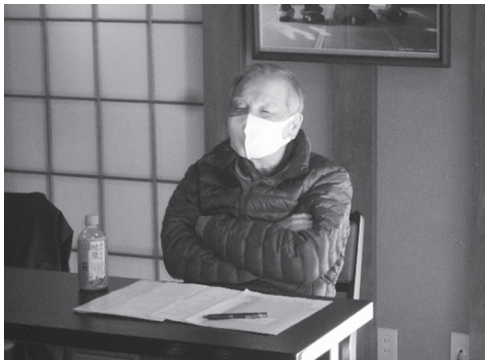
自分でやるようになるまでその大変さに気が付けなかった。申し訳ないと思う。陰で、これまで支えて下さったことに本当に感謝したい。

杉浦　カリスマを支える家族は大変だと思う。御老師が功成り名を遂げた功績の半分は大黒様だと思う。実は大黒様は、絵やギターなどいろいろな趣味を持っておられる。お体を大切にしながら、これからは好きなことを思う存分になさって欲しい。

今後の御老師への要望期待

小畑　御老師は東堂になられても、坐禅の指導と坐禅後のご提唱は頂くということで、今後もよろしくお願い致したい。また、永平寺で『正法眼蔵』の眼蔵会の講師も春秋二回やられている。今度は『行持の巻』に入られるという。この巻は大変長いので、その間、お体に気を付けて、是非、永平寺の講師を長く勤め下さるように願っている。

五十嵐　『明珠』に「従容録に学ぶ」というコーナーがある。そして、『従容録』についてきちんと書かれている本は意外と少ない。『碧巌録』はたくさん出版されているが、あそこまで『従容録』を読みやすく書かれているものは少ない。だから、あのコーナーを基にして、どうか百則を纏めて出版して頂きたい。ただ、示衆と本則はあるのだが、頌がない。その分、解説しないといけない部分が増えてきてしまうのだが。



五十嵐　嗣郎さん

小畑　私もそれを強く望みたい。そうなると、きっかけを作らないといけない。月例会ではなく、それと別に「従容録を聴く会」を月に一回くらいの頻度で行うのはどうか。そうすれば一年に一二則増えて、ゴールに近づく。五十嵐さんのおっしゃる通り、なんとか完成させたいですね。

杉浦　五十嵐さん、あらかじめ出版社に企画を持ち込みタイアップして出版ができるとよいですね。参禅会発足五〇周年記念行事としても絶好のプランだと思う。老師には是非、頑張って頂きたい。

ちなみに、成道会の時、私が老師に贈った、百年桜の書見台は、百歳まで提唱を続けて頂きたいという願望を込めたものだ。先にこちらが参ってしまうかもしれないが（笑い）。

また、大黒様絡みでもお願いがある。たまには、大黒様と一緒に、綺麗な景色の場所にでも行ってきてもらいたい。お仕事もいいですけどね。あれだけ大黒様への感謝を、『龍泉院だより』に書かれたので、具体的な行動でも労わって頂けると嬉しい。（司会　岡本）

特集　御老師と私（2）

後堂中野東禅老師を経て

流山市　中嶌　宏誠

かつて、昼食後、ほぼ毎日御茶ノ水駅前ニコライ堂近くの丸善書店で立ち読みをしていた。本堂が落慶した昭和五八年一〇月、袋井市可睡斎後堂中野東禅老師の『坐禅のすすめ』で龍泉院を知り、地図を頼りに訪ねた。

経過を話すと、椎名老師から坐禅の快諾を得た。毎月第四日曜日に行っているので八時半までに来るようにと指示を戴き、一一月の参禅会から坐っている。翌一二月四日に第一回目の「成道会」があり、人生節目の年となった。

上山以来二〇年余、坐禅「一炷」の最初に説かれる椎名老師の説法を聞いてきたが、それだけでは記憶に残らなかった。そこで、椎名老師の承諾を得ないままに録音を始め、平成九年、一〇年の二年がかりで一二の説法をテープ起こしをして椎名老師にお見せした。椎名老師は快く目を通してくださり、平成一〇年参禅会『口宣』と表題を付けてくださった。以来、椎名老師のご指導を賜り、平成一九年月例参禅会『口宣』〈一〇号〉まで装幀し会員に配布することが出来た。

『口宣』は『正法眼蔵』『正法眼蔵随聞記』『学道用心集』『良寛詩』『禅学辞典』などに触れ、勉強の機会を得ましたことに感謝している。

合掌

御老師との山旅

柏市　武田　博志

昭和六〇年の春、私はアポなしで初めて龍泉院を訪れた。御老師から、次回の参禅会に来るように言われ、参禅することにした。それから一年ほど経ったころ、御老師から思いがけない山登りのお誘いを受けた。目指すのは伊豆半島の天城山。幾度も計画を立てた未踏の山だった。私はすぐに「喜んでご一緒します」と返事をした。

天城高原登山口から登り始め、万三郎岳を経て天城峠への長い縦走路。それまで、山歩きはほとんど単独行だったので、二人で細い尾根道を黙々と歩くのは新鮮だった。天気良好、時折、微風がそよぐ快適な尾根歩き。

「休みますか」と声を掛けられ「はい」と返事をしてザックから水筒を出す。振り返ると、御老師は水筒を口につけ、ごくごくと水を飲んでいた。豪快そのもの。

山中を歩いていると頭の中は空っぽになり、さらに、御老師と並んで歩いていると、坐禅の境地に通じるのではと思えてくる。アセビの花咲く細道を下り、八丁池に出る。ベンチに腰掛けて休んでいると、汗も引き、ただ、静かな時間が過ぎていった。極上の山行だった。

淡々と歩き続けるその時の、御老師の後姿は心に刻まれ、今でも不意に思い出す。東堂となられた今、感謝と共に、これからもご活躍頂きたいと願っている。

私と参禅会

流山市　添田　昌弘

私が龍泉院参禅会に初めて参加したのは一九八七年（昭和六二年）の秋である。八王子市から当時の東葛飾郡沼南町に引越してきて、間もなく熱海市にいた父親が亡くなった。翌年、一周忌を行うのに、我が家の宗旨である曹洞宗のお寺を電話帳で龍泉院を探し出し、御老師をお尋ねした。

法事の後、御老師から参禅会を行っていることをお聞きし、参加することにした。私が会社と家を往復するだけの生活をしている

頃、先輩から「誘われたら先ず何でもやってみることだ。そうしないとつまらない人生を送ることになる」と言われ、俳句を誘われた。次が坐禅であった。当時、私は仏教のことも、禅の知識も全くなく、参禅の後、『正法眼蔵』のご提唱は全く理解出来なかった。仏教や禅の本を買い求め、参禅会の皆に追いつかねばと読み漁った。御老師の丁寧なお話と参禅会の先輩と仲間との出会いがあって三〇年以上坐禅を続けることが出来た。

三〇数年の間、御老師が企画された道元禅師が修行した天童寺を初め中国の仏教遺跡を訪れた。

まだまだ現役！眼蔵会で提唱する御老師

一番の思い出は仏教東漸の旅である。旅行の数年前にＮＨＫでシルクロードの放映があり、是非、行ってみたいと何冊かの本を購入していた。唐の玄奘三蔵が求法の旅に赴いた敦煌の莫高窟からウルムチ、トルファン、そこから夜行列車で鳩摩羅什の生地クチャへ、さらにバスでアクスまで行った。

御老師の最高のご説明を頂き、最高の旅であった。海から一番遠いところに沙の海があった。タクラマカン沙漠である。そのスケールと雄大な景観に圧倒された。

参禅会により豊かな林住期を過ごすことが出来た。有難く感謝。

正　師

我孫子市　清水　秀男

道元禅師は『学道用心集』に「参禅学道は次のように、正師を求むべき事」を説かれています。「仏道修行は指導する師匠が正しいか否かによるのであり、正しい師匠が求められないなら仏道は学ばない方がよい。そして、正師とは、行解相応の人、即ち理論と実践とが矛盾なく一致している人である」と。

椎名老師は正に行解相応の人だと存じます。修行により練り上げられた深い悟境と禅定力。経論を学び抜かれた該博な学識に基づく貴重な禅籍研究及び地元郷土史や宗教文化の研究。それと何よりも、迷える衆生へ身を粉にしての教化布教活動の実践に鑽仰あるのみです。

私は昭和五九年から御老師にご教導賜っており、感謝と共に真の正師に巡り逢えた幸せを噛みしめています。御老師から、平成二四年、雄大で禅機と気迫に満ちた「全機現」と揮毫して頂いた額を賜り、仏間に掲げ、自らを省みる縁にしています。

人生は今の連続であり、同時に死を背負って生きています。今・此処の瞬間を完全燃焼させて悔いなく生きることの大切さを「全機現」から学んでいます。

道遥かなる不肖の弟子ですが、東堂になられましても、変わらずお導き下さいますようお願い申し上げます。

御老師の指導「実践と継続」

柏市　松井　隆

御老師には平成八年、参禅会に参加して以来、多大なご指導を頂きました。それを簡単に括ることは難しいのですが「実践と継続」ではないかと思います。参禅会に参加して、

二五年に亘って坐ることができ、大変満足しています。

御老師のご指導では、何といっても『正法眼蔵』のご提唱だと思います。中でも圧巻は『行持の巻』で、「仏祖の大道　かならず無上の行持あり、道環して断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙もあらず、行持道環なり」で始まるこの巻には心を動かされました。

典座役への挑戦は、参禅会二五周年の中国仏跡旅行の際、阿育王寺の典座に出会ったことがきっかけであったと思います。

彼らの行動が、真摯な取り組みで、雲水への美味しい料理の提供はもとより、ゴミを出さないのは当然。栄養満点など、役割に対する前向きな姿勢でありました。

さらには、御老師による『典座教訓』のご提唱において、典座の役割が重要であること、日常の食文化に繋がること、料理の大切な事柄等々、分かり易く、お教えを頂いたのです。

庭の手入れもしかり。挑戦の道場を頂きました。参道の躑躅が咲き誇る降誕会の時だったと思います。同輩の小山氏と共に御老師に「躑躅の剪定に挑戦させて頂きたいが」と尋ねると、直ぐにお許しを得たのです。

まだまだ現役！　作務の合間に懇談

定例作務においては、参禅会の多くの皆さんに「実践と継続」にチャレンジして頂きました。

参禅会は、正しくお釈迦様のサンガ（僧伽）であり、「坐禅の力」の「実践と継続」の道場であると確信しています。自由参禅会や坐禅体験会の活動を充実させて、新人会員の拡大などに繋げたいとも思います。

御老師には、この様に多大なるご指導を賜り大変感謝申し上げます。これからも益々お元気にお過ごし頂き、参禅会のご指導を宜しくお願いします。

椎名老師は仏道の師

船橋市　阿部　史子

この度、椎名老師の住職ご退任の時を迎え、改めて椎名老師というご存在の大きさと、直にご指導を賜ったことの希有なる幸運を噛みしめております。

四〇年ほど前、実父他界後の法要以来、龍泉院の檀信徒となるお許しを得て、お世話になって参りました。

まだ、仏道の深遠なる教えに積極的に学ぶ姿勢がなく、それから一〇年の時を経て、私が五二歳、生きる力がなくなるほどの悲嘆絶望の底に沈み、椎名老師にお縋りいたしました。

椎名老師から坂村真民の『たんぽぽの本』と大慈悲溢れるお言葉を頂き、その後、参禅会にも導かれ、本堂での初心の坐禅の記憶はいまも鮮明です。私にとって仏道の師、人生の師として、尊敬し、学びついていくべき椎名老師との出会いがなければ…私の現在は考えられません。

椎名老師直伝の在家得度も授かり、「遇い難い仏法に逢い、遇い難い正師に逢う」この仏縁を得たことにより、「初発心を忘れず」「遇

一行修一行」に、これからも精進してまいります。

椎名老師はもとより、その陰ですべてを支えてこられた大黒様に厚く厚く御礼申し上げるとともに、一層のご健祥を祈念します。

大感謝

御老師と作務の指導

鎌ヶ谷市　小山　斎

御老師から坐禅堂前庭の植栽の剪定作業を申し付けられ、徒長枝を切り詰めていると、「もっと大胆に切るよう」との指導を頂いた。徒長枝のみでなく、込み合った枝も間引きし、風通しをよくし、樹形を見ながら行うようにと。出来れば将来の樹形を思って切り詰めるようにとのご指示であった。

なるほど、普段の行動でもその場での最善を尽くすと同時にその後にどうつながるかを考えておく必要があるということなのか。休憩時に全国各地のめずらしいお菓子を頂きながら御老師の修行時代のお話を聞くのが楽しかった。

龍泉院を訪ねたのは手賀沼へのサイクリングの帰りだった。山門をくぐると御老師が庭を掃除しており、ご挨拶をすると気さくにお話し頂き、参禅会へのお誘いを受けた。月例参禅会、作務とご指導を受ける中で、自己中心の行動から周囲を見ながら行動するようにと変わりつつあるような気がしていた。

このところ、参禅、作務に行かなくなると元の木阿弥で自己中心になってきているのを感じる。いつまでも師に導かれていないと糸の切れた凧のようになるものだな…。

御老師のお教えに感謝

我孫子市　小畑　二郎

私は、御老師から正伝の仏法とは何かについて、全身全霊をもって教えて頂きました。今から一七年前の二月の定例参禅会に初めて参禅した時、「小畑さん」と呼ぶ声がします。どうして私の名前を知っているのだろう。不思議なご縁を予感しました。後から分かったことですが、私と同姓の小畑節朗代表幹事を呼ぶ声でした。

それから、小畑さんの直々のご指導で、本堂で坐りました。坐るとすぐに、背後から御老師の若々しい声がありました。その声は、私の心に今でも変わらずに響きつづけています。あれから、幾年月、御老師のお教えは、私の心の支えになっています。おかげ様で、かの有名な日本の哲学者、西田幾多郎先生の次の一句にある境地と同じ気持ちに何とか近づくことができました。

人は人　吾は吾なり　とにかくに　吾が行く道を　吾は行くなり（寸心）

京都の哲学の道を歩くと、銀閣寺近くの路傍の石碑に刻まれているこの一句に出会います。他人の評判を気にしたり、仲間のすることを真似したり、他人と比較したりすることはやめなさい。自分にしかできないと信じることを、自分流にやり遂げれば、それでいいのだ。まさに、御老師から頂いた励ましのお言葉と響き合いました。けれども、何か欠けているものを感じました。

このたび、佐藤さんから送って頂いた『龍泉院だより』の御老師の退職のお言葉から、欠けているものが何かについて気付きました。それは、自未得度先度他、慈悲、思いやりの心でした。大黒様の長年のご苦労に対する御老師の感謝のお言葉に打たれました。これからは、ひとに感謝することを大切にしていこう。まだまだ、御老師に教えて頂くことは沢山あります。末永くお元気で、相変わらず我々のご指導をたまわることをお願いします。

無学達道

本来性と現実態（二）

柏市　五十嵐　嗣郎

先回は『普勧坐禅儀』で本来性と現実態について述べてみましたが、この本来性と現実態は『正法眼蔵』『辦道話』の巻でも見られます。初めに、「この法は、人人の分上にゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、証せざるにはうることなし」とあります。

この法とは、阿耨菩提、自受用三昧のことですが、このような無上正等正覚は本来身につけているはずだと、本来性がまず述べられています。しかし、現実の生活では仏道修行を実践しなければさとりはあらわれず、さとらなければ本来そなわっている阿耨菩提はどうしてもわがものにならない。即ち、わが生活上に、わが人格上にその法があらわれるためには、何としても仏道修行をやらなくてはならないという現実態があると述べられているのです。

修と証を分けない

今回は修と証との観点から、本来性と現実態について述べてみたいと思います。修と証については、『辦道話』で展開されている問答の第七番目に詳しく述べられています。ここでは修証これ一等であることが基本的に示され、修行とさとりと二つ別々だと思うのは外道の見解であると示されています。その後に修証一如の内容が詳細に示され、その最初に述べられているのが「初心の辦道すなはち本証の全体なり」です。

初心の辦道、すなわち初めて志をおこして坐禅する、その坐禅が本証の全体であって、決して本証の一部ではないと示され、続いて「修のほかに証をまつおもひなかれとをしふ。直指の本証なるがゆゑなるべし」と述べられています。

修行以外に別にさとりを期待するな、との教えです。即ち坐禅の修行はさとりの実現実行だと信じて坐れというのです。只管打坐の大切な心得です。

初心の坐禅も本証の坐禅

このように修行とさとりがちっとも距離が離れていないことが示されているのですが、次に「われらさいはひに一分の妙修を単伝せる、初心の辦道すなはち一分の本証を無為の地にうるなり」と述べられているのです。

われわれは幸いに本証の実現実行という尊い修行の一分を単伝している。即ち仏祖正伝の坐禅の仕方を教えてもらっている。だから、初心の坐禅辦道も本証の一分にかなっているのであるという意味です。

「初心の辦道」の本来性と現実態

さて、前には「初心の辦道すなはち本証の全体なり」とありました。しかるに、ここに来て「初心の辦道すなはち一分の本証を無為の地にうるなり」と変わっているのです。これはどういうわけでしょうか。

前の「初心の辦道すなはち本証の全体なり」は本来性に重きをおいて示されたのに対して、後の「われらさいはひに一分の妙修を単伝せる、初心の辦道すなはち一分の本証を無為の地にうるなり」は、現実態に重きをおいて示されたのではないでしょうか。ここにも本来性と現実態の両方が示されているのだと思うのです。

本来はだれでも坐禅をすれば仏さまとちっとも違わず、初心の坐禅も後心の坐禅も同じものであるが、実際には本証実現実行という修行を一歩一歩進むに従って、本証の現成がそれだけ進むことになると示されているのです。因みに『普勧坐禅儀』ではそのようなことを趣向という言葉で示されています。

合掌

沼南雑記

【定例参禅会・年間行事】
（　）内は座談の司会者

令和二年

●九月二七日　二六名
（市川　信彦）

●一〇月二五日　二三名
（川村　拓也）

●一一月二二日　二三名
（中原　悦雄）

●一二月六日　二七名
―成道会―

●一二月二七日　二一名
（山桐　照夫）

令和三年

●一月　緊急事態宣言により休止

●二月　緊急事態宣言により休止

【自由参禅】

九月　六日（七名）、二二日（二二名）
一〇月　四日（二二名）、一〇日（九名）
一一月　一日（一四名）、一四日（一四名）
一二月　六日（八名）、二二日（二二名）
一月　緊急事態宣言により休止
二月　緊急事態宣言により休止
二月一五日　涅槃会

【奉仕作務】

九月　四日、一二日、一八日
一〇月　二日、一〇日、一六日
一一月　六日、一四日、二〇日
一二月　四日、一二日、一八日
一月　一日、九日、一五日
二月　五日、一三日、一九日

【坐禅普及委員会】
全て休止

【編集後記】

▼令和三年の年番幹事の杉浦さん、山桐さんから、龍泉福竹製の『疫滅の刃』をお年玉として頂きました。色、形、大きさの素晴らしいペーパーナイフです。ありがとうございました。大切に使用致します。穏やかな元日、近くの児童公園で孫たちと竹とんぼの飛ばし合いをしました。

竹とんぼ　競う孫らの　初御空

子供たちの未来のために、今、自身の行うべきことを考えます。
（坂牧）

▼御老師の住職退任で特集を組みましたが、長く謦咳に接した方に限り、載らなかった方も多くいました。申し訳ありません。それにしても、昨年一〇月から四カ月、病に追われた日々でした。「今、ここ、自分」はどうあるべきか、よく考えていましたが、喉元過ぎると、なかなかそうも…。「煩悩は死ぬまで」という御老師の言葉が身に沁みます。
（岡本）

▼コロナが流行して一年が過ぎた。結果だけを見て「対策が後手後手」と騒ぐ輩が多いが、未知のウイルスには対処法対策しかありえない。要は個々人が感染予防を徹底すること。早い終息を祈るばかり。（佐藤）

▼最近になって、結跏趺坐を三〇分組んでも足が痛くなりにくくなりました。ですが、余計に思考を重ねる癖はなかなか直りません。こればかりは、スマホなどで強い刺激や沢山の情報を受け取る機会を減らし、その分坐る時間を増やす必要があります。そのためのきっかけ作りとして、早朝のオンライン坐禅会に参加しています。
（市川洋介）

▼大坂なおみ選手がまた全豪オープンで優勝しました。彼女は試合中、一球一球にただ集中する事を心掛けているそうです。彼女が若くして揺るがぬ平常心の境地に達した事に、五十を過ぎても身に着かないオジさんは脱帽するばかりです。
（市川信彦）

●発　行／天徳山龍泉院　千葉県柏市泉81　☎04（7191）1609
●印　刷／東港出版印刷株式会社　渋谷区渋谷2―7―7　☎03（6803）8470

龍泉院参禅会簡介（コロナで変更もあります）

【参　禅】

一、定例参禅会
・日　時　毎月第四日曜九時（初参加者は八時半）来山、正午解散
・坐　禅　口宣、坐禅、経行、坐禅の順
（坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分）
・提　唱　木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱
・座　談　自己紹介・喫茶・座談

一、自由参禅
・日　時　毎月第一日曜と第二土曜日
・坐　禅　九時から一〇時半時まで（入堂九時まで、退堂自由）
※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、一日接心　本年は六月二日、四炷の坐禅と提唱等
一、成道会　本年は一二月八日、坐禅二炷・法要・問答・法話等
一、他の行事　涅槃会（二月一五日）、花祭り（四月八日）、施食会（八月一六日）、歳末助け合い托鉢（一二月）、団体参禅受け入れ、歳末煤払い（一二月例会後）
毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等
一、作　務

【会報誌】

一、『明珠』（四月八日と一〇月五日発行）
一、『口宣』（年一回）
〔ウェブサイト　http://www.ryusenin.org/〕『明珠』『口宣』のバックナンバーがご覧になれます